

〔講演要旨〕 先人の教えに学ぶ四国防災八十八話～地震事例について～

松尾裕治¹⁾・中野晋²⁾・山本基³⁾・鳥居謙一⁴⁾・村上仁士²⁾

1) (財)日本建設情報総合センター, 2) 徳島大学環境防災研究センター, 3) (財)日本システム開発研究所, 4) 愛媛大学防災情報研究センター,

§ 1. はじめに

地域に残る言い伝えなどの防災話は住民にとって馴染み深いものであり、人々の防災意識を高め、防災対策に活用することができると考えられる。そうした観点から、著者らは、昔から多くの災害を被ってきた四国に注目し、現地調査や文献収集などから防災話を集めた。

これらの中には住民の災害経験や勤にもとづく、防災対策の方策を知る上で極めて重要な教訓が多くある。しかし、これらの教訓は住民にあまり知られていない。

そこで、著者らは水害、土砂災害、地震・津波、高潮、渇水の災害に関する代表的な話から有用な教訓を抽出し、住民や学生などを対象とした防災講義などで多くの方に報せる防災啓発活動に取り組んでいる。

本発表では、四国の災害特性を踏まえて、この代表的な防災話の防災啓発の効果・期待および、地震・津波の災害に関する代表的な話から得られた教訓、防災対策について紹介する。

§ 2. 防災話から教訓の抽出と活用

昔も今も、防護水準を超える災害は発生する。その際には、家庭・地域が主体的に災害に向き合うローテク術が必要になる。災害時に住民が簡単に対応できる防災術が人の命を守る上で役立つことは、過去の災害事例が示している。有名な「稲むらの火」のような話をまずは知らない、住民は地震後の津波を考え、逃げるという避難行動をとることができないのである。

「四国防災八十八話検討委員会」(委員長:村上仁士)では、現地調査、文献調査、住民公募により、四国に伝わる災害にまつわる話 706 編(図1)を収集し、それぞれを丹念に読み込み、今日の防災対策に役立つ教訓を抽出した。

これらの教訓は、四国の人々が先人から受け継いだ財産であり、今後の防災活動に活用していくことが重要であると考えられる。

§ 3. 防災教育ツールとして四国防災八十八話を作成

「四国防災八十八話検討委員会」では、これら 706 編の災害にまつわる話の中から、史実に基づくこと、今日的な教訓が含まれること、読者を惹きつけること、災害の種類や発生した時代、地域などを考慮して、最終的に四国八十八箇所因んで、八十八話を選定した。

その成果は「先人の教えに学ぶ 四国防災八十八話」(四国地方整備局、2008)という冊子(図2)となっている。

この冊子が、住民の心に響き、防災意識の向上や災害時の行動に活かされることが期待される場所である。

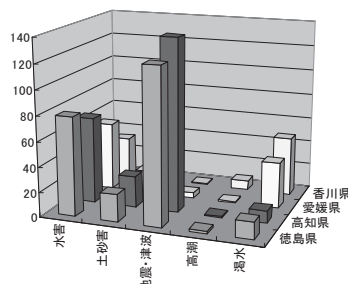


図1 県・災害別の防災話数 図2 防災八十八話冊子

§ 4. 広報とその反響

四国防災八十八話は、行政の出前講座で紹介されたり、「四国防災八十八話検討委員会」の委員を務めた研究者の広報や編集を担当した愛媛大学のホームページへの掲載などにより、反響は大きく、著者らへの講演依頼が市町村や自主防災組織、大学などから届いている。

また、大学生が防災八十八話をテーマにした漫画や紙芝居づくりを行ったりその防災話の紙芝居が NHK のアナウンサーによって朗読され 8 日わたって四国 4 県に放送されるなどしている。

大学の市民防災養成講座の感想文の分析からは、図3のように地震・津波などへの関心が高く、防災教育ツールとして期待できると考えられる。

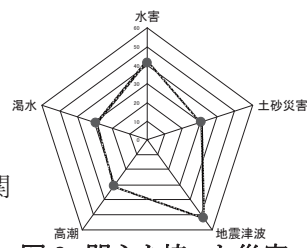


図3 関心を持った災害

§ 5. 百度石に刻まれた教え

徳島市には、安政南海地震の後、建立された百度石(写真1)に刻まれた教えがある。裏面に「ももとせを経ぬほどにはかよの震濤有り」と刻まれ、南海地震の周期的な発生を予測し、警鐘している。後世の人に地震・津波の教訓を伝えたいという思いが伝わってくる。



写真1 百度石

§ 6. おわりに

特に私たちの寿命を越えて発生するような大地震事例については、災害への備えを忘れないように、防災話として、地震・津波の恐ろしさとその対処する方法(教訓)を子々孫々に伝えていくことが必須である。そのためには、地域に馴染み深い防災話を掘り下げて話すことができる防災達人を地域住民の中に多く育てていくことが肝要である。その第一歩として、多くの方に Yahoo!または Google の検索サイトで「四国防災八十八話」を検索し、防災八十八話を読んでいただきたいと考えている。